

再び「ケブネル現象」について

本誌2017年(39巻)1月号のtopics欄に、「isomorphic responseとisotopic response」という総説を書いた。Isomorphic response (of Koebner)はケブネル現象のことで、isotopic responseとは、もともとと内的要因(ほとんどは帯状疱疹)による皮膚の障害(第一の病変)が治癒した、一見正常にみえる部位に、まったく別の皮膚症状(第二の病変)がみられるものとして、1995年にWolfらによって報告された。最初の病変としては帯状疱疹が圧倒的に多いためpostherpetic isotopic responseと呼ばれることもあったが、近年次第に拡大解釈され、外傷部位(外的な要因)や瘢痕、色素沈着まで含めると最近のWolf教授の論文に書かれている(Clin Dermatol, 2017)。

前述の総説でも書いたが、isotopic responseはケブネル現象にほかならないという立場がある。筆者自身もisotopic responseの大部分はケブネル現象で説明がつくという考えに傾いていると書いた。最近たまたま2018年の『JEADV』に‘Koebner’s sheep in Wolf’s clothing’という論文をみかけたので興味深く読んだ。Happle教授の論点は、障害を受け治癒した皮膚は正常ではないというもので、そこに別な病変が生じてくるのはケブネル現象そのものというものである。外傷を受けた部位は、乾癬に限らず皮膚症状を起こしやすく、vulnerable areaと呼ばれる(ほかにimmunocompromised districtやlocus minoris resistentiaeといういい方もある)。外傷部位は一見正常に治ったようにみえてもskin ‘memory’は永続する可能性を1991年にKligman教授は指摘しているし、治癒した皮膚にresident memory T-cellがいつまでも定着して存在し、次に来る刺激に備えているという最近の話題も記憶に新しい。

乾癬が発症する前から存在していた旧い外傷瘢痕上に、乾癬が生じる現象もケブネル現象と考えられてきた。ケブネル現象で発症した乾癬だってある。しかし、乾癬が発症してから受けた外傷部位に乾癬が生じた場合ケブネルで、発症以前に存在していた瘢痕に乾癬が出た場合はisotopicとしている論文をみかけることがあり、これには納得できない。ほかにも、虫刺されや注射針を刺した部位、お灸をした痕に乾癬が生じる現象はケブネル現象にほかならないのだが、点状の外傷を受けてそれが跡形なく治癒した後に乾癬が生じたと考えればisotopic responseになってしまうと、Happle論文は指摘している。ほかにも矛盾点があり、たとえば肥厚性瘢痕は外傷後に生じることが多いが、帯状疱疹後にも生じうる。帯状疱疹後にケロイドにならずに治癒した部位に乾癬が生じたらisotopic responseで、ケロイドになった部位に生じたらケブネル現象というのもおかしい。

A sheep in Wolf’s clothingとPubMedに入力すると科を問わず論文が出てくる。悪性にみえたが実は良性とか、悪玉と考えられていたものが善玉の面もある、という意味で使われる。Happle論文のタイトルには、ケブネル現象というシンプルなものにWolf教授が服(意味合い)をどんどん着せていくといったニュアンスが込められているのではと勝手に推測してしまう。あるいは、すでにご存命でないKoebner教授を反論できないおとなしい羊に例えているのかもしれない。Happle教授は、isotopic responseという名前は歴史的な間違いとまで指摘しているが、このような呼び方が流行るとますます同じような論文が増える。今後もこの名前での論文が出るのだろうか。

山 本 俊 幸